

見てきたヨーロッパ

県企画開発部次長 牧野 秀一



去る10月、日本駐車場協会主催、建設省都市局、日本
工業会議所後援による、欧州都市視察の機会をえて、約
一月にわたり、オランダ、イギリス、ドイツ、スイス
フランス、イタリー、エジプト、タイ、香港の各国を視
察して来ましたが、見てきたこと感じたことなど思いつ
つままにこの誌上をお借りして書いてみました。

視察を訪れて特に目につきます
のは、道路や建物など日本に比べ
て社会資本の蓄積が大きいことと
都市には緑が多いことです。

ローマのアツビア街道のように
かつての道はローマに通ずると言
われた昔からの舗石道路が残つて
いますしアムステルダム、ロンド
ン、パリなどには古いレンガ舗装
の道が今日でも立派に使用され
ています。建物も各所に何百年、
何十年前に造られたものが沢山残
っています。オランダは花が多い
し、スイスは特に緑に恵まれ国全
体が公園といった感じがいたしま

す。空港から都市に至る道路はたいがい4車線程度の自
動車専用道路があつて(有料ではない)、ほとんどが時速
100キロはなく、100~120キロのスピードで走っています。
ローマからナポリ、ボンベイ、ソレントまで往復 600キ
ロの道をハイヤーで日帰りの旅をしました。

ローマ、ナポリ間には4車線の有料自動車道路があり
まして、我々は平均120キロ、最高140キロで走つて来ま
した。それでも我々の車を更に追い越してゆくものが相

当にありました。

ナポリは昔からミナポリを見て死ねと云われ風光明媚
の所といわれています。白い色調の建物と碧い海が強い
南国の太陽光線をはねかえしている遠景は誠にきれいで
すが、一步街に入りますと建物はきれいとは言えませ
ん。ミナポリの旗と云われるアパートからアパートへ
ひもをつるして洗濯物を干してあ
る姿も見られます。

ボンベイは西暦79年ペスピオス
火山の噴火によつて一朝にして廃
きよと化したところです。現在ま
でにその跡が発掘されており、あ
らゆる道路が敷石で舗装されてい
ますし、上下水道は完備され、ミ
シンなども博物館に保存されてい
ます。このように約2,000年前に
すぐれた都市環境の中で生活して
いたことを思いますと、人間の生
活などは2,000年たつてもあまり
進歩していないものだと感しま
す。



(テイクス川、ロンドン橋の筆者)

パリーのコンコルド広場(革命の広場と呼ばれ、西歴
1,700年の頃断頭台のあつたところで、ルイ16世マリ
ー・アントワネットなども処刑されている)を北西に道
をとりますと、シャンゼリゼーの大通りに出ます。この
大通りは適度の傾斜をしており、そのつきるところに凱
旋門がそびえています。道路は巾100m位あつて車でい
つぱいです。マロニエの並木歩道は幅広くきれいで
すが、その約半分を使用してレストランや喫茶店のテラス

が出ています。

このような情景は歐洲の街のあちこちで見かけましたが、ホコリと風の多い日本の繁華街では作ろうと思つても到底望めないことでしょう。

一杯のコーヒーかビールで長い時間ぼんやりと歩く人を眺めながら過すことは歐洲の人々にとつての楽しみの一つのようです。

ドイツのケルンにあるドーム教会は高さ 109 m でゴシック式のものとしては世界最大との事ですが、1248年から6世紀かけて完成しましたし、イタリーのベニスにあるサンマルコ寺院は今から900年前に出来ましたが、その後大理石、モザイク、ガラスなどの修理にこれまた600年かかつたそうです。このように古い、そして長い時間をかけて建設した建物が各所に残っています。

戦災のあととは戦後20年たつた今日ドイツ、イギリス、オランダなどでおそのあとを見ることが出来ません。特にベルリンはその80%が戦災をうけましたが、いづれも復興のあとと顕著なものがあり、古い練瓦造りの建物の間に近代的高層建築が建てられています何かアンバランスな感じを覚えるのは私一人ではないでしょう。

パリ、ローマには全く戦災のあとはありません。

戦災復興で特に印象深いのは、オランダのロッテルダムです。駅前では盛んに地下鉄工事を施行してますし、立派な商店街、アパート群、街路が出来ています。

ここはライン川の最下流部にある港町ですが、ひどい戦災をうけ終戦後6日にして土地の所有権をなくし(但し記録にとどめ、別の土地が欲しい人には金を出したそうです。)6週間で従来より広域な区域を計画対象として、新しい都市計画をたて実施に移つたそうです。

港は現在9万トンのタンカーが入れますが、更に15万トンのタンカーが入れるようにしたいとの事で、このタンカーはすでに日本に発注済みとのことでした。

人口の90%がアパート住いで、150年前から土地収用があり土地の取得について問題になるのは値段だけだそうです。

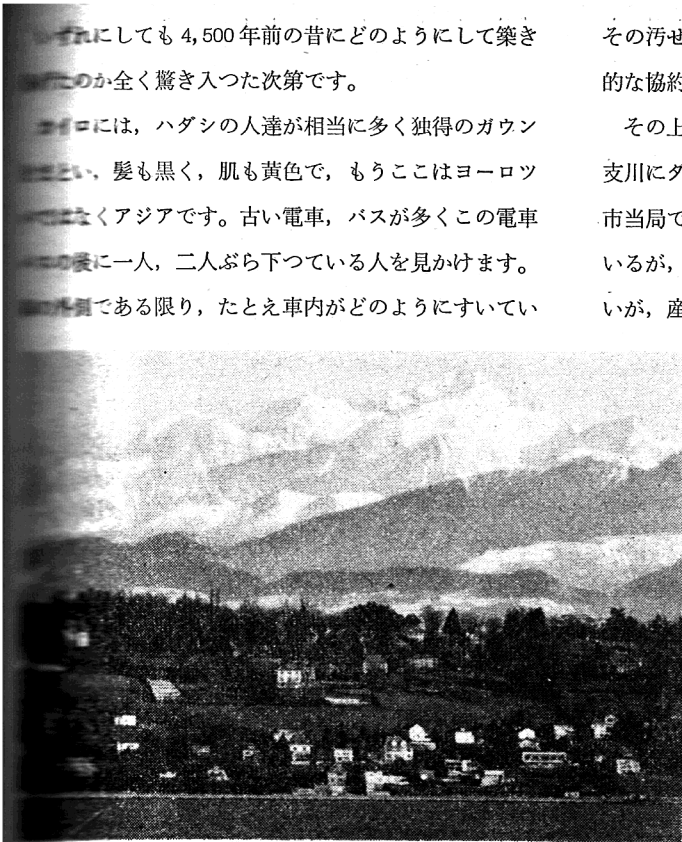
パリーのエツフェル塔は西歴1898年に完成したそうです。高さ300m、高さの点では東京タワーに及びませんがとにかく約80年前にこのような塔を作つた技術は大した



(ベニスのゴンドラ)

ものです。東京タワーと比較して非常にごつい感じがありますが、その当時の技術としては止むを得なかつたことでしょう。

カイロでは、何と言つてもピラミッドとスフィンクスが有名です。自動車で30分程ゆきますと砂漠の中に忽然と最高のキゼーのピラミッドがそびえています。このピラミッドは紀元前2600年に王様の墓所として、2.5トンの石を約230万個積み上げ、高さは初め147mでしたが現在は137mとのことで、10万人の人達が20年かかつたと推定されています。底辺の一边が200mの正方形で、その辺がほぼ正確に東西南北を示しています。



(ジュネーブ郊外よりモンブランを望む)

すべてただ乗りだそう。一般民衆の貧しさとは立派な道路、ナセル・シティのようなニュー・アパ。近代的アパートが作られています。日本に比べて雨量は少なく、約1/3位で年間500ミリ位です。従って水害もほとんどありません。この都市を貫流している河川も、東京の隅田川のように汚染された河川は見かけません。スイスのレマン湖、ローヌ川などは澄みきっていて全くきれいでしたし、ローヌ川のヘルベ川、アムステルダム郊外の運河などでは魚の姿を見かけました。エジプトのナイル川は泥濁りでしたが、周辺がすべて砂漠であるため、いつもこのように濁っているのではありません。ライン川の下流部の水はきれいとは言えません。オランダのロッテルダム、ハーグ、アムステルダムなど、いずれもラインの水を水道用水として使用しておりますが

その汚せん問題についてロッテルダムの市当局は、国際的な協約が必要であると語っております。

その上流のドイツのボン市では、ラインからではなく支川にダムを作つて飲料水として引水しています。ボン市当局では現行の法律「ウォーター・ロー」で規制しているが、これ以上強く規制するため新しい法律を作りたいが、産業の力が強くて中々出来ないとのことでした。

アムステルダムは北のベニスと呼ばれ、ベニスと共に水の都と言われております。アムステルダムは運河によつて90の島、400の橋がありますし、ベニスも同様に118の島、160の運河、400以上の橋があります。両者の異つている点は、前者は淡水であり橋はほとんど自動車が通れますけれども、後者は海水で橋には階段があつて自動車は通れません。

ベニスは空港のある外洋に面したリド島などの一部を除いては、交通はすべて舟運によつています。

昔、ゲルマンに追われて砂と水と空に造られたと言われております。当時は、飲料水は天の水に頼つていましたが、現在は外から水道が引いてあります。汚水処理について1ヶ所に集めて処理していることですが充分ではない様で、一歩裏側の運河に入りますとややくさいにおいがします。

香港はカイトク飛行場のある大陸側の九竜と香港島から成りたつており、この間にフェリー・ボートが間断なく通つておまして約20分かかります。

香港島の山の標高は約1800フィートですが、島には水がないので15ヶ所程度のダムを作つて飲料水源としています。人口は登録者が380万人、外推定40万人、計420万人と言われ、あとどの位いるか不明、と申しますのは毎月中共から合法的に50人、非合法的に25人位入国してきますがその数のはつきりつかめないためです。

難民と呼ばれるこれらの人達は水道も電気もない山の中腹にバラック建の家に住んでおります。一方島には、

ヒルトン・ホテル（香港島で最高28階）などの近代的建物群が建てられつつあり、極めて対象的でした。

歐洲の10月の気候は日本とほぼ同様でしたが、ロンドンやアムステルダムでは毎日霧の日が多く、このため飛行機の2～3時間遅れるのは普通でした。

北部の太陽光線は非常に弱い感じでしたが、フランスのニース、イタリーのベニスあたりから南下するに従って、光線も次第に強くなつて来ました。

道路もきれいで、風もあまり吹かず、気候も良かったのでワイシャツなどもあまりよごれませんでした。カイロ以降はこのような訳にはゆきません。カイロは暑く周辺が砂漠のせいもありましょう。パキスタンのカラチインドのデリーは全く暑い、バンコックはむし暑い感じ。香港島では海水浴をしているのを見かけました。

旅行中、バスの中、ホテル、街頭で日本人の姿を各所で見かけました。パリ、ローマ、ツリーツヒなどの商店の店頭には日本人のお客様歓迎します。店主と日本語で書かれてありましたし、パリの観光バスには日本語、英語、仏語、ドイツ語、エスペラント語などのボタンがシートのわきにあつて、自分の望む所をおすとその国の言葉がテープで吹きこまれていてイヤホンで市内の案内を聞けるようになっていました。

偶然かも知れませんが日本語のボタンが一番最初にありました。それ程に日本人の旅行者は多く、又良いお客

さんなのでしょう。

店頭に並べられてある品物の値段を日本円に換算しながら比較してみました。オランダが日本と大体同じ位で、他の国は皆高い様です。

ドイツのハンブルグで日本のアルバイト学生の月の最低生活費は4万円、ローマでは6万円で、パリではもっと高いとのことでした。

私がパリの床屋に行つた時は、15フラン（日本円で1,100円）、しかも顔を剃らずに払われました。

歐洲では、商店は土曜日は半日、日曜日は休み、平日でも午後2～3時間は商店は、勿論、会社、役所も閉まり、商店はこの間よろい戸を下して閉めてしまいます。

ホテル住まいは日本のように、女中さんがサービスしてくれる訳でなし、チップに気をつかわねばなりません。

日本の生活になれた日本人旅行者にとつて、全く華やかで味気なく窮屈です。

日本という国は何とまあサービスの良い国（あるいはサービス過剰か）であろうと帰国してからつくづく思ふ次第です。

順序不同で恐縮でしたが、これで終らせていただきます。私自身で見て来たことは別として、聞いた話の中にはあるいは誤りもあるかも知れませんが、この点は御承下さい。



統計教育雑感

司 文 中 田 課 統 計 県

11月11日、12の両日、島根県松江市において第11回統計教育研究大会が開催され全国の関係者千余人が参加し、活発な研究討議が行なわれた。

この松江市を象徴する宍道湖畔の三つの会場に、小、中、高校の各部会の研究発表、パネル討議など熱心に展開された統計教育の発展と普及振興のため大きな成果が挙げられた。

この大会に、統計教育実験学校として3カ年にわたつて研究をつづけられた鹿島郡旭中学校の田口教諭が「統計思想開発のあらまし」と題して、同校が統計教育の普及振興のために、どのようなことを行つてきたか、その経緯を発表された。この発表は、同校が統計教育の直接の対象者としての児童、生徒に対して統計教育という観点から期待される役割として

1. 統計に明るい生徒
2. 統計に親しむ生徒
3. 統計を大切にする生徒
4. 統計により確しさを求める生徒

達成をはかることによつて科学的、合理的な生活態度を身につけるとともに、生徒を教師にあるいは父兄に置き換へることにより、教師または父兄の像とし、地区ぐるみの普及振興をはるといふ基本的態度を樹立してその達成に努めてきた経過を明らかにして討議の具体的な資料を提供しこれによつて統計教育の普及振興についての活発な討議が展開された。

この統計大会に参加して統計教育の実践研究とその普及に真剣にとりこんでいられる現場の先生方のすがたに感服し、統計教育ということをも再認識するために拙文を綴る次第である。

統計教育と教育統計

最近、統計教育ということばを見たり聞えたりすることが多くなつてきた。この統計教育と似たようなことばに教育統計というのがあつてちよつと誤りやすいようである。

教育統計とは、教育という分野において、その集団内のあるもろの現象を統計手法を利用して調査し、分析解明して問題の解決や究明にあたることであり、人口統計や経済統計などと同格に扱われるものである。

統計教育とは、広い意味でいえば学校や職場において

統計を専門的、技術的に教えることもあるし、また社会人を対象として統計知識や統計の趣旨を普及させることもあるが、ここでいう統計教育は、義務教育を中心として一般社会に統計的教養を高めることにあるといわれている。

日常生活において誰もが知つていなければならない統計についての知識を理解させ、常識としての統計を日常生活の中にとり入れ、今後ますます高度化するであろう社会に対しあるいは私生活の中で起つてくると思われるいろいろな問題に対して統計的な見方、考え方で対処できるような態度、習慣を養つていこうとすることがねらいである。

統計教育は戦後来日した米国使節団のライス報告の中で「日本は普通教育制度を利用して、民衆の間に統計的観念を養成しなければならない。統計教育の問題は初級、上級学校全部にわたつて着手されなくてはならない」という勧告の示すとおり日本の統計水準の低さを指摘された結果、統計教育の必要性が注目され小、中、高校の児童、生徒に統計というものの見方、考え方や使い方をどのように教え、育てていくか、また統計を学校教育の各領域にどのように活用していくかという研究が急速に進められるようになった。

統計教育の意義と目標

ライス報告書の中に「民主社会においては、国民は、すくなくとも社会および経済問題の根本を理解する必要があるが、これらの問題を合理的に理解するには、普通統計的手段によらなければならない、もしこどもの時に……体得しているならば成人したあかつきに、これらの問題をいかに解決するか非常に役立つであろう」と、要するに民主社会に生きる国民の理想像の一つとして、統計的な考え方をもちた人間を掲げ、そのような人間を育成するためには、子どものときからそれに親しませ、つちかつていかねばならないということになり、民主教育の一つの目標として統計教育は位置づけられてきている。現在の教材の中には統計がたくさん使われているがこれを児童、生徒に徹底するように適切な指導が行なわれているかどうか、統計教育はいままで無意識的、散発的に取り扱つていた統計教材の取り扱いを意図的に、そして、系統的に、学校教育の全領域にわたつて整備することであつて、各教科の教育をよりよく充実させるよう

統計教育を位置づける考えであるといわれている。

統計教育の目標とするところは

- (1) 統計の意味、性格やその必要性、使い方、基礎的な概念や知識を理解させる。
- (2) 統計調査の企画、実施または統計表、グラフのまとめ方、代表値などの求め方、資料の選択、吟味など統計を正しく作つたり見たりする技能を伸ばす。
- (3) 統計を学習や日常生活に適切に利用し、いろいろな問題の解決に統計的な見方、考え方であるような態度、習慣を育てる。

以上の三点が統計教育の目標であるとされている。

現在の社会は、高度化政策によつて大きく変転していき、社会の進展にもなつて統計学やその技術も目覚ましい発展をとげ、その応用分野に広汎になつて各行政機関はもちろん、民間企業においても統計を数多く使つて合理的な運営が行なわれるようになり、社会の要請としても統計教育は当然必要になつてくるわけであつて、児童生徒がこれから経験するいろいろなことがらを処理したり、社会や自然のすがたを理解するためにも統計方法や統計数字の存在することを知らせ、社会や日常生活の身近な生活の中で統計がどのように使われているかを示す統計の方式や基本的なことから、その必要性を会得させていくことがたいせつであらう。

本県における統計教育

沿革

本県の統計教育に関する研究は、18年前昭和22年にはじまる。ライス勧告によつて文部省が、統計教育の普及振興に着手し、県においても統計教育の普及振興について統計主管であつた県調査課（現企画開発部統計課）と県教委調査課（現総務課調査統計係）との間に、その必要性に対処し、これを学校教育の領域にいかにとり入れるかについての話し合が進められたがこの当時はいまのように統計教育に対し一貫した研究、指導方針が打ち出されていないため、県としてもこれをどのように取り扱つていくか、むづかしい問題であつたようである。

昭和22年に手始めとして県調査課が、教育調査研究校という名称で数校を委嘱したが、この研究校の性格は、いまの統計教育実験学校とは異なり、官庁統計の調査実施に対して協力を求め、児童、生徒が統計調査を通じて統計に親しむ態度を持たせるといふ程度のものであつた。

昭和26年になつて、県教委調査がはじめて教育調査研究校を指定し事実上の統計教育の普及の段階に入つたのであり、この研究校では、各校が独自の研究を行なうことによつて統計教育をいかに教育の各領域に取り扱うかについてもつとも苦心が払われた時代であつた。

昭和29年になつて、はじめ統計教育ということばが使われる。このときから統計教育の研究をテーマとした今

のような系統的な統計教育の実践研究が進められることになり、統計教育もいよいよ軌道にのつたということになる。

昭和35年になつて統計教育の主管課は茨城県教育庁指導課になり、優秀な指導課を得て本県の統計教育もいよいよ充実したものとなつた。

昭和36年、この年は、県統計教育によつて特筆されるべき事であつた。すなわち県教育研究会の中に統計教育研究部が設けられた。従来県からの一方的とも思われる指定校（35年から実験学校）として委嘱を受けた学校向けの統計教育という観念を持たれがちであつたものが現場の先生からの盛りあがりによつて結成された統計教育研究会は、県と現場との一体化をはかり真の統計教育研究体制が確立したことになつたわけである。この組織は各郡市に支部を設け管下小中学校に部員を置き積極的に統計教育の研究のため各種の事業を行うことになつた。

現在まで、統計教育の指定校として県の委嘱を受け、実践研究を続け本県統計教育の発展のため尽力してきた学校数は小学校27、中学校21校あつて、統計教育推進のための中心となつて本県統計教育の歴史に大きな足跡を残してきたわけである。

現況

現在の県統計教育界の実態は、知事部局統計課、県教委指導課さらに統計教育研究部会が三者一体となつて進に努めている。

すなわち、教育指導の面は指導課が、統計実務、資料、統計図表実技指導などは県統計課が、さらに教育研究部は県と緊密な連けいのもとに現場の教師の蒙普及のため各種講習会、研究会、研究発表会、模範の発行など活発な運動を展開し他県も羨むほど一致の態勢が確立され同一歩調で普及振興に努めている。

今後の課題として考えられることは、教育の門外として私見で当つていないかも知れないが……指定校の課題として……現在の実験学校は小学校1校だけであるが、これは県教委の実験学校の指定が、実験地区として大きく地域実験地区に切り替えられたためで止むを得ないことではあるとしても普通の教科には長い伝統と歴史があり国民必須の科目であるから社会全体のものとして誰もが知っていることであり、今更とりたてて普及と騒ぎたてるようなものでもないだろうが統計教育の場合、統計というものに永い歴史があつたにもかかず社会一般に普及し難いものであるだけに、統計教育普通教科以外のものとして学校自体としてやつてもよし、やらなくてもよしといった考え方も起つてくるのはあるまいか、今までは実験学校の研究を通じ統計が一般教科の向上のためにいかに必要であるかを実践研究のうえから周知させてきただけに、実験学校

としてももつと増加してもよいのではないだろうか、
 指導も当然こういつたことについての指導を積極的に行な
 なければならぬと考えられる。

また、指導と教師の関係について……いかに必要性が
 高からといつても一般教科以外のこの統計教育は学校
 生活のものとして行なわなければ一担任の先生だけでは
 成り立たないものであり、管理者の理解と協力があ
 りてこそ達成されるものではないか、またこれを指導す
 る関係者も重要性を十分認識して社会的な問題として
 これからの在り方を研究してよりよき推進を進めて
 いかねばならぬ。

統計教育研究部としては、各役員のためまざる努力と

精進によつてその成果を充分發揮しているが、さらに一
 歩前進して教師全体のものとして統計教育が、一般なら
 びに教育関係者に理解され、教育部門のすみずみまで統
 計教育が浸透するように今後のご精進をお願いいたした
 い。

以上、統計教育のことについてふれてみたが、いまや
 統計は私達のくらしの中に深く入りこんでおり、私達は
 日常生活の中に知らず知らずに統計の数字を見たり聞え
 たりしているわけであるが、これからは生活の合理化の
 ために統計を意識的に考えて生活にとり入れ私達のくらし
 をより明るく豊かに育てていくように努力すべきでは
 ないかと考えている。

県内産業の展望

(その 12)

— 産業革命期の経済展望 —

県統計課 横須賀 弘

前号でお話ししましたように、わが国の産業革命期に
 なる諸工業の立地をみてみますと、製糸業、綿紡績業
 などの軽工業が中心領域を占め、安価な労働力を求めて
 各地に分散して立地し、工業地域の形成には大した影響
 をもたなかつたのであります。他方、明治初年以來から
 工業地帯形成の下地は東京、大阪を中心にぼつぼつみら
 ぬ諸都市にも、すなはち、日立をはじめとして宇
 都呂、生世保、長崎、徳山、川口などの工業都市化が着々
 進められてきたのであります。

このような地域別にみて特徴的な工業地帯の形成を本
 県とせしめたのが第 1 次世界大戦であり、この好況を通
 じて資本主義の急速な移行産業構造の高度化が行なわれ
 てきたのであります。

また、重化学工業化によつてその後 4 大工業地帯（東
 京、神奈川、大阪、福岡）が確立し、他方大戦中の内外
 貿易の拡大は各地域の産業に、工場制工業化を実現し、
 より一層産地の特徴を具備するにいたりしました。

以上が明治末期から第 1 次大戦までの国内工業の概観
 であります。これを細部にわたつてみますと、明治末

期から大正はじめにかけて国内経済がやや沈滞の様相を
 みせ、不況に悩んでいたわが国の経済は明治 42 年から大
 正 3 年にかけて工場数についてみますと南関東、近畿臨
 海のような工業地帯では増加したものの、北関東、北陸、
 東海近畿内陸、山陰、山陽、四国、北九州、南九州など
 の 9 地帯では減少しております。

本県でも大正 3 年の工場数は 225 工場で、これは大正 2
 年の 236 工場に比べ 11 工場の減少となつております。
 しかし、この半面、従業者数は大正 3 年は 9,924 人で、
 大正 2 年に比べ 271 人（2 年：9,653 人）の増加を示し
 ております。こうした傾向は各地域とも同じことが云え
 るのであります。これは、事業所の数の減少している地
 域に小経営の駆逐と経営規模の上昇が、事業所、従業者
 数ともに増加している地域に経営規模の上昇と小経営の
 増加がみられたということでありませう。

すなはち、本県産業の構造を軽工業部門ならびに重工
 業部門のそれぞれの割合についてみてみますと次のと
 りであります。

(第 1 表) 大正初期の本県の産業構造

| | 工 場 数 | | 従 業 者 数 | | 生 産 額 | |
|-------|--------|--------|---------|--------|--------|--------|
| | 大正 2 年 | 大正 3 年 | 大正 2 年 | 大正 3 年 | 大正 2 年 | 大正 3 年 |
| 軽工業部門 | 92.5 % | 90.3 % | 79.4 % | 77.1 % | 41.7 % | 33.6 % |
| 重工業部門 | 7.5 | 9.7 | 20.6 | 22.9 | 58.3 | 66.4 |

また、大正3年から大正8年の第1次世界大戦時に、東京、神奈川、大阪、兵庫、福岡などの工業地帯において従業者数の増加が事業所数の増加をはるかに上回り、大企業の形成が本格化してまいりました。このことを明確に県内の概観を示したのが第1図であります。

したがって、前述のことは県内産業にも適合した傾向ともみられ、当時の県内有力産業であるところの食品産業（和酒、醤油製造業を含む）、繊維産業（製糸業を含む）、非鉄産業（日鉱を含む）、電機産業（日製を含む）等についてみましてもそのことがよく分ります。つまり第2表からこれらのことが明らかにされるでしょう。すなわち、大正3年と大正8年の産業構造は次でわかりますように重工業の従業者数の割合の伸度の高いこ

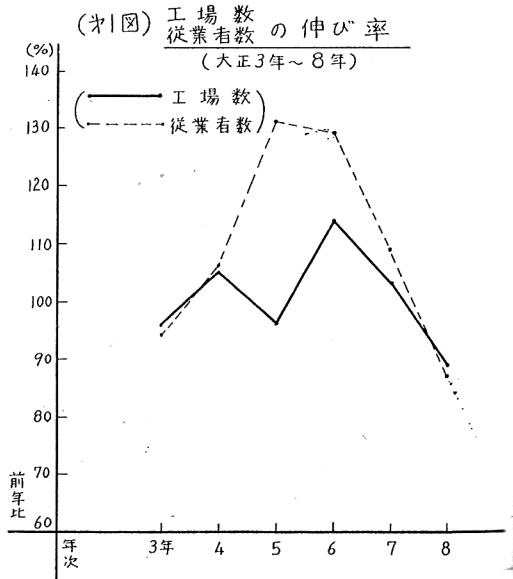
| | (重工業部門) | | (軽工業部門) | |
|------|---------|------|---------|------|
| | 工場数 | 従業者数 | 工場数 | 従業者数 |
| 大正3年 | 9.7 | 22.9 | 90.3 | 77.1 |
| 〃 8年 | 10.1 | 53.6 | 89.9 | 46.4 |

(第2表) 県内主要産業の比較

| 項 目 産業別 | 大 正 3 年 | | | 大 正 8 年 | | |
|------------|---------|------------|----------------|---------|------------|-----------------|
| | 工場数 | 従業者数 | 生産額 | 工場数 | 従業者数 | 生産額 |
| 食 料 | 92 | 人 1,114 | 円 2,800,664 | 86 | 人 1,273 | 円 10,277,072 |
| 織 維 | 64 | 3,793 | 2,663,216 | 71 | 4,229 | 12,975,819 |
| 非 鉄 | 2 | 994 | 10,669,277 | 3 | 4,859 | 16,631,947 |
| 電 機 | 5 | 537 | 968,081 | 2 | 2,179 | 7,340,912 |

とが分ります。このことは第2表にうかがえるように、非鉄ならびに電機産業が第1次大戦の影響から大きな成長をとげたことによるものと考へてよいでしょう。

この期間における統計の数字は工業発展の上で著しい速度と質の上で特徴を示しております。いうまでもなくこの期間を特徴づけるのは第1次大戦でありましょう。交戦国への軍需品の輸出、輸出余力を失つた欧州諸国



とくにアジア市場への日本商品の進出、交戦国からの入停止商品の国産化などの要因は日本の工業に飛躍的な発展をもたらし、わが国の産業革命過程はこの時期に達したとみる事が出来るのであります。こうした経済の推移が、県内経済にも波及し、各種産業にそれぞれ大なり小なり影響を与え飛躍的な成長をみるにつつたものと推察されるのであります。

